

子どもたちの未来と湿地と環境教育と

○松永 龍¹, 清水 日香里², 福角 百華¹, 水野 歌乃¹, 岡野 臣康¹, 吉田 磨^{1,2}

¹酪農学園大・環境共生学類,²酪農学園大・大学院酪農学研究科

【はじめに】

ラムサール条約には、大きな目的がある。それは保全・再生、ワイズユース、交流・学習の3つである。酪農学園大学環境地球化学研究室では、これらの3つの考え方を基に自然環境教育研究及び、環境教育を実施している。本発表では研究室で実践してきた活動についてワイズユース、交流・学習の2つを通して検証する。

本研究における、対象者の特徴の類似点は近郊に高等教育機関が存在しないことである。その結果、進学とともに都市に人口が流れていき、地方では持続可能性が危ぶまれている。

【方法】

ラムサール条約登録湿地として登録されている美唄市の宮島沼、浜頓別町のクッチャロ湖をフィールドとした。宮島沼では小中学生が中心であるマガレンジャーや滝川高校 SSHの生徒を対象とし、浜頓別町では小学生であるジュニアガイドアカデミーを対象として地域連携型環境教育を行った。そこで、子どもたちが実際のフィールド観測の場で用いられる観測方法や観測結果を体験する場を設けることで、自分たちが住んでいる地域の環境問題について考える機会を設けた。

【結果・考察】

大学と地域が連携することにより、大学訪問や講義など子どもたちに専門的な教育を授け、実践的な知識を提供することができる。環境地球化学研究室では、2010年からジュニアガイドアカデミー、2013年から滝川高校、2015年からマガレンジャーへの環境教育を実施してきた。宮島沼のマガレンジャーでは、大学生が作成したチャンバーを使い子どもたちがふゆみずたんぼから放出される温室効果気体を観測し、分析した。その結果をもとに持続可能な宮島沼について発表やまとめを行った。滝川高校への環境教育では、ふゆみずたんぼでの温室効果気体の観測、宮島沼の栄養塩の観測や分析、水生生物など宮島沼を取り巻く環境について学習した。ジュニアガイドアカデミーへの環境教育では、環境キャンプと称した自然学習を一泊のキャンプを通じて実施した。

3つの活動において、大学に招待し、大学の調査機器を使用した分析を行うこととした。大学での研究や実際に大学を経験することで、等身大の大学を深く学ぶことができた。さらに将来の選択肢の幅を広げる機会にもなった。

また大学生においても社会経験の一つとしてコミュニケーション能力の向上や現地の特色を再確認できる好機となっている。